

# Happy New Year



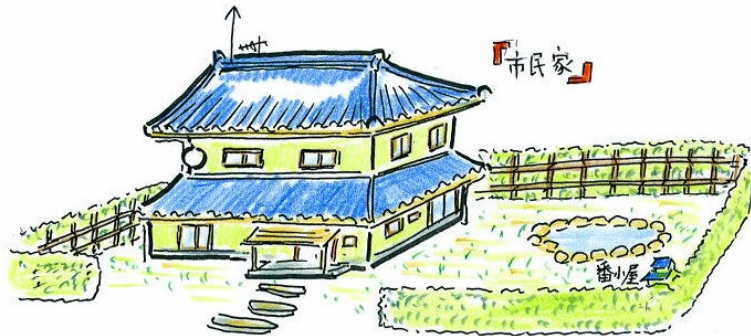
◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆

# これまでのあらすじ

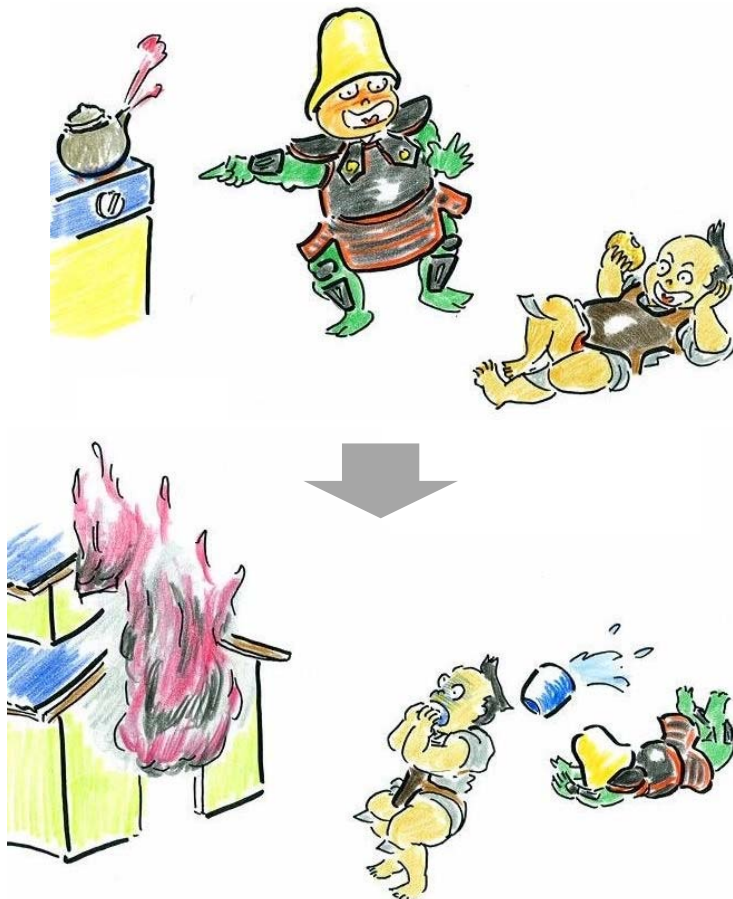
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の<sup>ちゅうげん</sup>中間 ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん<sup>えん</sup>には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

てんとく  
点得幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだあい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。



ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの

**火災予防奮闘記** をどうぞご覧ください。

# 支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.38

「のうのう、ちえん（支援）、ちえんは龍という生き物を知っておるきゃ？」

と拙者達が新年のお屋敷の点検をいたしておりますと、姫様がお声を掛けて  
来られたのじゃった。

「おっ、姫様、明けましておめでとうございます。何です、龍？龍ですか？」

そりゃ知っておりますが・・・」と拙者が答えると

「見ちゃことはあるのきゃ？」と姫様・・・

「へ？」

「だかりゃあ、見ちゃことがあるのきゃと聞いておりゆ。」と姫様の言葉に

「そ、それがしは勿論ですが、誰も見た者は居ないかと・・・」と答える拙

者を遮り

「あっしは見たことがありますぜ。」とご助がしゃしゃり出て参ったのじゃった。



「おお、ぼすけ（ご助）は見ちゃことがありゆの？どこでちゃ？あない（案内）せよ。」と姫様に言われたご助は

「へ？あ、あない（案内）と・・・申されても・・・」と言葉に窮しながら

「あ、あれは去年の暮れだったですかねえ、NHKのアーカイブスで世界遺産『石見銀山』の放送で見たんでやすが・・・今は見れやせんぜ。」と答えたご助に、

「嫌じゃ、嫌じゃ。えんちゃんは龍が見ちゃいの！」と姫様は泣き叫び始めたのじゃ。

「あーあ、これは見るまで暴れるパターンじゃな・・・」と呟きながらご助を見ると、ご助も展開を悟ったものか

「だ、旦那様あ」とすすがるような眼を拙者に向けながら情けない声を出すのじゃった。

「ソチが見たことがあると申したからじゃろ。責任をとって一緒に石見へ行ってくれば良からう。」と突き放すと

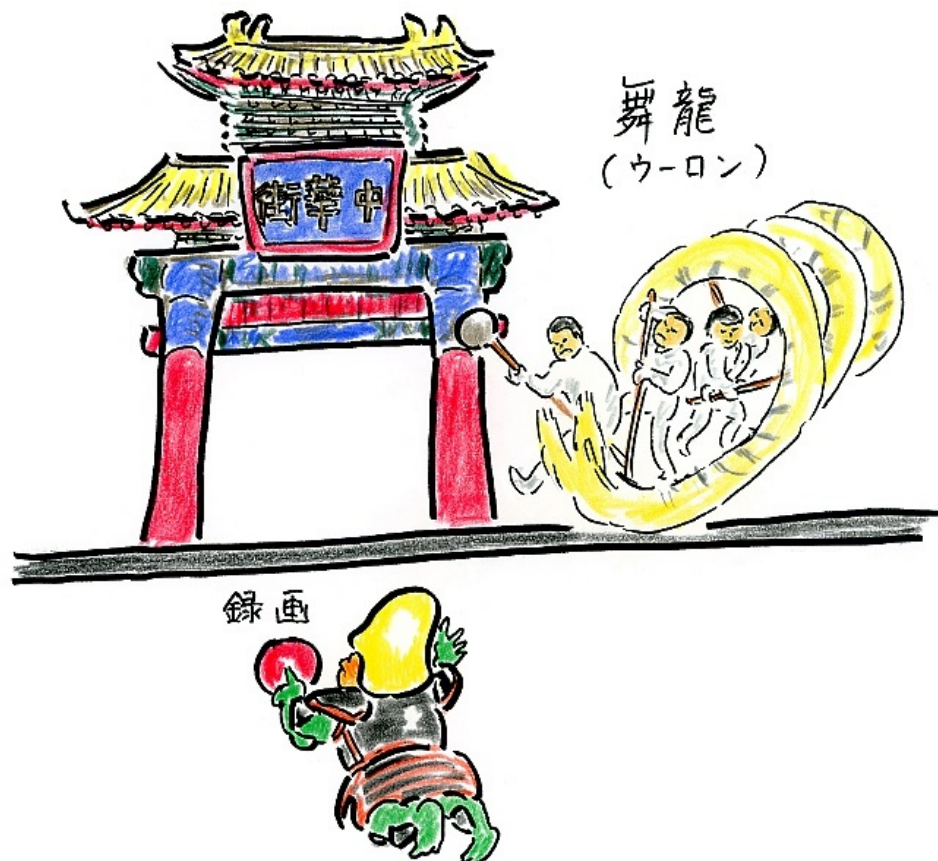
「だ、旦那様あ」という悲哀のこもったご助の声と「見ちゃい見ちゃい」と暴れる姫様の声を聞きながして、拙者は点検を続けたのじゃった。



午前の点検を終え、番小屋で昼食を摂っておった時のことじゃ。民放で新春特別番組『横浜中華街からおめでとうございます』という特番が始まったのじゃ。

「横浜中華街か・・・もしかしたらウーロン（舞龍）も見られるかも・・・」  
と拙者は録画を始めたのじゃが、案の定、番組の冒頭でウーロンが紹介されてな、勇壮な龍の舞が披露されるのを見ながら拙者は

「後でこの録画をお見せすれば姫様も納得されるじゃろ。ご助には悪いが、これもあ奴の不用意な発言からでた報い、いわば自業自得と云うものじゃ。もう少しお灸をすえてやろうかの。」と午後の点検へと出かけたのじゃった。



そして夕方、拙者は録画したウーロンをお見せするため、ビデオ一体型のテレビデオを抱え、お屋敷へと向かいましたのじゃ。

そうしたら、お庭の真ん中に大きな龍が！

「ひっ？」と拙者が息を飲む気配に気づいたものか、尻尾を向けていた龍がクルリと拙者の方に向き直ったのじゃった。

生まれて初めて見た本物の龍の恐怖に

「い、いかん！食われる！」と腰が抜けへたり込んだ拙者は

「ううううっご、ご助え、助けて呉れえ、姫様あ」と悲鳴を上げたのじゃった。

「てん・・・」と龍が何かを喋るのと同時に、龍の大きな口から紅蓮の炎が噴き出した。

「ひいいい・・・く、食わないで下せえ！」と拙者が懇願すると





「だ、旦那様、あっしですよ。」と龍が、いや龍の大きな口の中のご助が声を掛けて来たのじゃった。

「?? ご、ご助かい？」と腰を抜かした拙者が聞くと

「へえ、あっしですよ。」とご助龍は答えた。

「な、何をしておるのじゃ！」と不甲斐ない姿を見られた恥ずかしさに声を荒げた拙者じゃったが、

「へへっ、旦那様、腰が抜けたままじゃ流石に威厳がありやせんぜ。」と言われ

「き、き、貴さまっ・・・」と叫んだのじゃが、その声をかき消すように、

ご助龍は

「てん・・・」と話すとその口から、ボオオオオオ・・・と再び炎を噴き出

したのじゃった。



「うわちちちっ・・・」と拙者は身をよじって炎から逃げたのじゃが、

「旦那様があっしを見捨てたからこうなったんですぜ！」とご助龍は、火を噴きながら後を追いかけてくるのじゃった。

「ま、待て、話せば分かる。」という拙者にご助龍は

「問答いらぬ、点火」と言うと炎を噴き出したのじゃった。

「ひいいい・・・どっかで聞いたようなやり取りじゃの。何があったのじゃ？

話してみよ。」との拙者の声に、追いかけるのを止めたご助龍は

「ううううう」と急に泣き出したのじゃった。

「ど、どうしたのじゃ？」と拙者が尋ねると

「あのクソガキが・・・あ、姫様のことですがね。あのクソガキが龍を見た  
いって聞かなかったんでさ。」とご助龍。

「そうじゃろうな。さもありません。」と拙者。

「さ、最初は絵を描いて差し上げたんですが聞くわけもなく、仕方なくお屋敷裏の猫の小春殿に相談したら、金庫の中からこれを貸して下さったんでさ。」

とご助龍は、おのれの胴体をつまんで見せたのじゃった。

「ほほう、これは良くできた衣装じゃな。誰が作ったのじゃ？」と拙者が聞くと

「作り物じゃねえですぜ。八幡様（神社）の境内で小春が拾った青い大将の  
抜け殻でさ。」とご助龍が答えるので

「ふーん、近衛の大将なら知っておるが、青い大将のな・・・はて？青い大将・・・

あ、あ、青大しょ・・・う？ そ、そりゃあ大変じゃろ！」と拙者が驚くのを横目でみて



「旦那様、大変なのはここからだったんですぜ。なんせ、あのクソガキは完璧な龍を見たいといって暴れるんですぜ。」

「そ、そうよな。あのクソガキ・・・いや姫様のことじゃからな。」と相槌を打つと

「この龍の頭、何だと思ひやす？本多忠勝の出世兜に加賀獅子舞の獅子頭がしらをくっつけてあるんですぜ。」

「よ、よう出来ておるのお」と拙者が感心すると

「感心しねえでくだせえよ旦那様。あのクソガキときたら、あっしをこの抜け殻にねじ込み頭を被せると、両方をくっ付けちまいやがったんでさ。それもアロンアルファでですぜ。」とご助龍が泣き出し

「そりゃあ・・・」と慰める言葉を言おうとして、妙にマッチしたご助龍の姿の滑稽さに、拙者が不用意に笑い出すと



「な、何がおかしいんでい!」とご助龍は声をあげると「点火—」と叫びながら、頭の中でペットボトルの液体を口に含み、手にしたライターに火を着け、拙者に向け口の中の液体を噴き出した・・・。

その液体はゴオオオッ・・・と、音を立てながら燃え上がり、大きな炎となって拙者を襲ってきたのじゃった。

(令和6年2月号に続く)